

ポスト・白人文化の創作原理 (2)

—ケネス・レクスロスの「宋文化」論—

田口 哲也・李 心媛・高田 直子・村田 冴子

本稿はケネス・レクスロスの南宋文化を論じた、“Sung Culture” (1960) と題されたエッセイの翻訳と注釈である。宋時代は生活レベルが向上し、いわゆる「中国文化」と現代で理解されている社会を実現したが、そのイデオロギーの中核となったのがこの時代に発達した朱子学であった。レクスロスは、インドと中国を西洋文明の光が届かない遅れた国として見下し、収奪の対象としてしかアジアを見ることのできなかつた西欧白人社会に向けて 1960 年にすでにポスト・コロニアリズム的な視点を文化論に導入していた。

1. 解説

本稿はケネス・レクスロスの南宋文化を論じた、“Sung Culture” と題されたエッセイの主要部分の翻訳と注釈である。初出は *ARTnews ANNUAL #3* (1960) で、その時のタイトルは “Speculations on the Times of Sung” であった。芸術専門誌であった点と「南宋文化についての試論」というふうに「試論」という限定が付されていた 2 点に注意してほしい。ここにその意識を試みた部分は原著の三分の二ほどであるが、残りの部分は宋文化の中心的な芸術である水墨画と陶器についての専門的な著述である。

本稿の目的は現在の我々が「中国」と呼ぶときの具体的な文化要素が南宋文化の中にあつたというレクスロスの主張を再度確認することにある。中国の文化的な影響力は東アジア、東南アジアなど広範囲にわたっている。特に東アジアはその圧倒的な影響下にあつた。また現代、13 億を超える人間が自分たちを「中国人」だと考えているが、このような多数の人間のアイデンティティを束ねる中国の文化とは何なのであろうか。一つの解として、レクスロスの論考を紹介しておきたい。この論考は中国文化の基礎を知る手がかりになるだけでなく、その一変形とも言える日本文化を考

えるとき原点にもなるのではないか。本稿の中のレクスロスの言にもあるように、オーストラリアに流されたコックニーがロンドンのコックニーをさらに純化させて保存したように、日本文化は南宋文化の亜種とは考えられないものか。このような議論の前提としてレクスロスの論考は着実な足場を与えてくれるのではなからうか。

原著は翌年にレクスロスの評論を集めた論集 *Assays* に再録されるが、その時には元々あつた “Speculations” は削除され現行の “Sung Culture” となっている。レクスロスは『ブリタニカ百科大事典』の「文学」の項目を担当したことでも知られる碩学であり、学術的な信頼度も高かつたことから、1 年後には「試論」はすでに定説となつたかのようなようだ。初出が芸術専門誌であつた点と「試論」という限定が付されていた 2 点に注意が必要であると述べたが、さらにもう 1 点加えると、原典が出版された 1960 年という年である。

1960 年は 50 年代の直後であり、60 年代というよりは 50 年代の雰囲気が強が残つていた時代だ。日本ではまだ第 2 次世界大戦の匂いが残つていた岸内閣、60 年安保の時代である。当時は、米軍の艦載機による機銃掃射を受けて穴だらけになつた廃墟などが日本の津々浦々に残つていた。アメリカでは恐怖のマッカーシズムがようやく終

わりを告げようとしていた。マッカーシズムは一言でいうなら「反共恐怖政治」である。世界は欧米を中心とする資本主義陣営とソ連・中国を中心とする共産主義陣営が角を突き合わせていた冷戦時代の真ただ中であつた。ドイツ、ベトナム、朝鮮は両陣営に分断されていた。アメリカは異様なまでの反共主義を徹底させ、自分たちの政府を転覆させようとする共産主義のスパイが国内にいるというパラノイアに陥り、露骨なレッドパージを展開していた。喜劇王チャップリンがハリウッドから追放されたのはその一例である。この反共主義の総本山のアメリカから見れば、中国とは毛沢東一味が牛耳る共産中国で、略して「中共」と蔑視していた時代にレクスロスが冷静な学問的分析を展開させていた事実は彼の知的勇気を示すものとして記憶されるべきである。

また、恐怖政治とは対照的に、当時のアメリカは経済的にはとびぬけていて、世界の富を集め、空前の繁栄を誇っていた。自家用車の量産に象徴される大量生産・大量消費の物質主義全盛の時代にレクスロスが「仏教的空」の世界を論じていた点も、数々ある彼のヒップな精神を象徴する事象のひとつである。

最後になるが、この論考がインドや中国を西洋文明の光が届かない遅れた国として見下し、収奪の対象としてしかアジアを見ることのできなかつた西欧白人社会に向けて書かれていることを見逃してはならない。個人的なエピソードだが、1990年代にイギリスで暮らしていたときのことである。下宿の大家と親しく会話をするようになったのだが、ある時その大家が次のように私に語った。「現役時代はブリティッシュ・テレコム (=英国最大手の電話会社) で働いていたから、世界中ほとんどどこでも行ったよ。君の国の日本は確かアフリカ大陸にあったよな。」本人はいたって真面目な顔をして言っているのだから笑うに笑えなかつたのだが、なべて欧州、アメリカ東海岸の東洋理解はこの程度であると覚悟したほうがよい。

とはいうものの、そういう私たちにしたって東洋のことをどれだけ知っているのだろうか。本稿を読めば私たちがいかに西欧中心で、アジアの文化に無知であるかを思い知らされることになる。正直なところこのレクスロスのエッセイを読むまでの私の中国理解はひどく浅く、それはイギリス時代の私の大家の日本理解と五十歩百歩であつた。南宋文化の魅力を初めて知つたのも、朱子学

と禅宗の世界観がインド仏教とどのように違うかを知つたのも、また仏教の空の思想や菩薩の定義を知つたのも、恥ずかしながら実はこのエッセイによってであつた。日本の文化をよく理解するためにも、このレクスロスの宋文化論が読まれることを願う。

本稿は一般の西欧人よりはアジアに対する理解が幾分ましな日本人の読者を対象にしているので、レクスロスがオリジナルで言及している仏教や中国文明の具体的な内容に関しては日本の学校教育やマスコミが用いている用語などを用いるようにした。また、レクスロスが無知な西欧人への解説を施している個所に関しては、日本人の読者にはかえって煩わしいと思える部分は説明を省いて慣用表現一語で置き換えたところもある。また、できるだけレクスロスのユーモアとウィットに富んだ文体を生かすために、少々砕けすぎた感のある日本語表現を用いた個所もある。ただし、レクスロスの議論が翻訳によって逸れてしまうことのないように原典の意味内容についてはできる限りの時間をかけて解釈している。宋文化、ひいては中国文化に対するレクスロスの深い理解を知るための一助になれば幸いである。注釈は李心媛、高田直子、村田冴子が担当した。

2. 翻訳「宋の文化」

春の夜

金の香炉が消え、水時計も止まった
冷たい風が身を震わせる
春は私を苦しめ、眠りを脅かす
露台のうえに月が花々の影を落とす¹

¹夜直

金爐香盡漏聲殘，翦翦輕風陣陣寒。
春色惱人眠不得，月移花影上欄干。

夜直

金爐香盡きて漏聲殘し 翦翦の輕風陣陣の寒さ
春色人を悩まして眠り得ず 月は花の影を移して欄干に
上らしむ

金の炉に香は尽き時を知らせる太鼓の音が消えてゆく。
ひとなぎひとなぎとそよ風が吹くごとにひとしきりひと
しきりと寒さがおしよせる。春のけはいはひとをなやませ
眠りつかせない、かたむく月が花のかげを欄干のところ
まではいあがらせた。(清水茂、『中国詩人選集第二集
第4巻 王安石』、岩波書店、1962、p.76)

これは大政治家であり、改革者であった王安石² (1021-86) の詩である。王安石の政敵であり、代表的な宋代の詩人でありまた書家でもあった蘇東坡³ は次のように書いた。

花影

それは大理石の柱廊に驚くほど厚く積み上がる
 小姓たちが何度も呼ばれ、掃き清める
 するとその時、陽が再び現れ、それを運び去る
 しかし、案ずることなかれ、次に月が上る頃には
 影は舞い戻る⁴

「政治家にしては教養があるじゃない」と、皆さんは思うかもしれない。答えはイエスでありノーでもある。なぜか。それは、この二つの詩は実は政治的な詩であって、宦官や、外国人や、宮廷外から来た勢力、つまり、王安石や蘇東坡たちの改革に反対する勢力のことをあてこすっているのだ。ベトナムがフランスの植民地支配に終止符を打った、あのディエンビエンフーの激戦のときに書かれたイーデンの詩のようでもある。

山々を見渡すバルコニーに立ち
 学識もある完璧な愛人のミュージックが

² 王安石 (Wang Anshi, 1021-1086) 北宋の政治家・文学者。字は介甫、号は半山。北宋の第6代皇帝神宗即位後宰相となり、新法を主唱し政治改革を断行したが、保守派の反対により辞職。唐宋八大家 (唐の韓愈、柳宗元、宋の欧陽脩、蘇洵、蘇軾、蘇轍、曾鞏、王安石) の一人である。 (『世界大百科事典』、平凡社、1988、p.13、『辞林 21』、三省堂編集所、1993、p.255、『大辞泉 第二版』、小学館、2012、pp.469-470)

³ 蘇東坡 (Su Dongpo、1037-1101) 宋代の士大夫。眉山 (四川省) の人。号は東坡居士。各地の知事を務めるとき新法党の王安石らの政策に反対し、何度も流罪された。唐宋八大家の一人である。詩も宋代詩人中第1に位した。書家として宋代四大家 (蘇軾、黄庭堅、米芾、蔡襄) に数えられる。 (『世界大百科事典』、平凡社、1988、pp.398-399、『辞林 21』、三省堂編集所、1993、p.1206、『大辞泉 第二版』、小学館、2012、p.2137)

⁴ 花影
 重重疊疊上瑤台、幾度呼童掃不開。
 剛被太陽收拾去、卻教明月送將來。
 花影
 重重疊疊として瑤台上る 幾度と童を呼び掃くも開かず
 剛 (た) だ太陽を收拾し去せ 卻って明月をして将来を送りせしめん
 (李宗為、『千家詩・神童詩・続神童詩』、上海古籍出版社、1993、p.53 本書ではこの詩の著者は謝枋得とある。)

黄金の百合を散りばめた、赤、白、青のガーゼ地のズボン姿で
 繊細で控えめな物腰で
 金の象の国の最高の料理を「西洋の主」に給仕する
 ああ、だが彼女はそれを象嵌が施された卓の端においてしまった
 主のローブのきらびやかな刺繍が台無しになる

宋王朝はこんな感じだった。極致まで発展した文明は、生々しい現実を覆い隠すものとして用いられたのだ。実際、様々な出来事がこの文明の舞台裏、すなわち、蒸気や香の煙が立ち昇る御簾の向こうで起こった。宋王朝は中国のどの王朝よりタフで、現実的であり、中産階級的でさえあった。現在私たちが「これは中国的だ」と考える感性が開花したのは宋の時代であった。生命に対する中国の反応の仕方すべてを、ひとつの包括的な意匠に包み込んだのが宋の文化だ。

逃れようとしても逃れられないのが、歴史を最初に書いた儒学者の歴史的視点だ。儒学者は法にこだわる。儒者の語る理想の王朝は、王朝そのものが存在しなかった無秩序な時代のものだ。目の前の宮廷こそが民の代理人、収穫の司祭である王によって具現化された、儒教的理想であると信じて疑わなかったのだ。だが、楽園の化身として儒者が見た宮廷は、実際にはシャルマーニュ大帝の宮廷のように多文化的であり、地元の土壌から生まれたようなものは少なかった。儒者は自分たちが理想としたもの以外のあらゆる文化を退ける。例えば、宋と同時代の北方の原モンゴル人は野蛮人だと言う。暴力をふるわず、教養があり、人間的な心を持ち、すべての不測の事態に備えて四書五経をそらんじる者が理想とされた。実際には儒者以外の集団が国家を治め、中国文化に大いに貢献したかもしれないのだが、残念ながらそのことを書き記した記録を見つけることは難しい。

漢王朝と唐王朝は混合的な帝国主義体制であった。それに対して宋は一国主義的であり、統合的であった。宋の時代になって初めて文化が根底的に集約され、外部からの侵入が止み、今日まで私たちが、儒教的、あるいは、少しルースに言うなら、中国的と呼んでいるものが登場したのだ。外部の者たち、すなわちチベット人や、モンゴル人や、満人の政治家たちがアジアの内側に中国の帝国、すなわち唐を打ち立てた。唐は崩壊し、その後には略奪と混乱と短命な「王朝」が続き、やが

て宋が現れて中国を統一し、帝国のほうは外国人に任せるようになった。宋は伝統的な中国の国境線から、そしてついには自分たちの故郷からさえ逃れ、「河の南」まで後退した。かつて長髪の野蛮人が住むとされていた土地が、中国からの移民で満たされることになったのだ。ここで儒学者たちは初めて他の集団に干渉されない環境を獲得し、ちょうど母国を追放されたロンドンのコックニーの囚人たちが19世紀のオーストラリアにイングランドよりさらにイングランド的なコミュニティーを建設したように、固有の文化を洗練させていった。⁵

だが注意すべきは、宋が敗れて北中国から逃れてきたと考えるのは正しくない点である。南への移動は多分に経済的な理由であった。イスラムはオアシスを通る交易ルート（シルクロード）を閉じ、南海を通る、いわゆるモンスーン地帯の交易路（海のシルクロード）⁶を開いた。すなわち、ビジネスの舞台は北から南へと移ったのだ。もう一つの理由は人間に常な快樂原則である。引退した白人のニュー Yorker たちがニューヨークをプエルトリコ人の移民や仕事を求めて北部にやって来た黒人たちに譲り、自分たちは気候の良い南カリフォルニアに移住したのと似ている。

この大きな文化の移動は、予期しえない、また、教科書に載っている歴史からは想像もできないような結果をもたらした。まず生活水準が格段に上がった。農民は新たな土地を得て、都市部に住む人間は新しい交易と産業を得て、輝かしい唐の時代より豊かになった。大量の中産階級の商人たちが誕生し、初めて儒者以外の人間が読み書きを覚えた。贅沢品が広がり、物価は着実に上昇し始め、インフレは王朝の崩壊まで猛烈な勢いで続いた。儒者たちが中国社会に儒者の楽園という色褪せることのない神話

を築いたのは、このような社会背景のもとであった。ただ、この神話を作り上げる前に彼らは道教⁷を深山に住む仙人といったイメージに大衆化させ、また、インド経由の哲学的仏教の教理⁸とその大衆的な信仰の形をも融合させて自分たちの理想とする世界のイデオロギーに取り込むことを忘れなかった。そのため、宋時代に発達した社会は、冒険的で流動的であると同時に、また保守的で時代錯誤的であった。

長い導入部になったが、この議論がなければ宋時代を本当に理解することができないので許してほしい。この時代は見かけと本質が決定的に違っていたのだが、それは単に仏教的懐疑主義から出たものではない。宋の社会や文化は解決不能な矛盾に

⁷ 道教は中国古代の民間信仰を基盤とし、自然発生的に生まれた宗教である。神仙思想を中核とし、老荘思想、民間の現世利益的信仰などが加わり、更に儒教・仏教の教理などが融合して形成された。その理想は長生不死である。初めは教祖に相当するものがなかったが前漢の中頃から老子を教祖とし、教説を利用することにより神仙説の権威向上を図った。六朝時代に宗教としての形を整えるようになった。知識人の中にも信者を獲得したが、同時に仏教との対立摩擦も起こるようになった。そんな中で道教は仏教の教理を吸収し、強化を図った。（福井文雅、『ブリタニカ国際大百科事典 14』、「道教」、ティビーエス・ブリタニカ、1975、pp.264-270、丸山松幸、『ブリタニカ国際大百科事典 13』、「中国哲学」、ティビーエス・ブリタニカ、1975、pp.166-174、福永光司、『世界宗教大辞典』、「中国哲学」、平凡社、1991、pp.1337-1342、森三樹三郎、『世界宗教大辞典』、「中国哲学」、平凡社、1991、pp.1257-1259）

⁸ 仏教は世界三大宗教のうちのひとつ。ブッタ（「真理を覚った者」）の説いた教えであり、またブッタになるための教えのことである。紀元前500年頃にインドにおいて出現し、それと同時に他のアジア諸国に広がり大きな影響を及ぼした。仏教の基本教理は「諸行無常」「一切皆苦」「諸法無我」「涅槃寂靜」の四句に要約される。中国における仏教は、後漢王朝時代にインドから伝わったとされる。もたらされた仏典はサンスクリット語から漢語に翻訳された。その際、中国人の人間観や儒教の身分倫理、道教の自然観などに適合するよう内容を書き換えて翻訳され、中国的理解が行われた。隋・唐時代に知識人の多くが仏教に関心を寄せた。知識人たちは貴族化し、経世の意欲を失っていたが、宋王朝時代に入り、再び政治家・官吏としての本領を取り戻し、出家超俗の仏教に対して不安を抱くようになった。そこで経国済民を使命とする儒学の復興が始まるが、旧来のままの儒学は哲学による基礎づけを欠いていた。知識人には仏教哲学が深く浸透しており、無意識のうちに影響を受け、儒学の思想へ持ち込まれことから、仏教は禅宗が優位を占める中国独自の宗教哲学へと変容した。（中村元、『ブリタニカ国際大百科事典 17』、「仏教」、ティビーエス・ブリタニカ、1975、pp.311-324、丸山松幸、『ブリタニカ国際大百科事典 13』、「中国哲学」、ティビーエス・ブリタニカ、1975、pp.166-174、石井米雄、『世界宗教大辞典』、「仏教」、平凡社、1991、pp.1648-1660、森三樹三郎、『世界宗教大辞典』、「中国哲学」、平凡社、1991、pp.1257-1259）

⁵ 19世紀のオーストラリアはイギリス植民地であり、イギリスの囚人はここに流刑された。最初アポリジニの方が多かったが、だんだんイギリスからの移民が増えていき、元のオーストラリアの文化が侵略され、イギリスの文化が広がった。

⁶ モンスーンはインド洋および南アジア、東南アジアにおいて、夏季は南西から、冬季は北東から吹く季節風である。モンスーン交易は中世には、ペルシア人、アラブ人、中国人がインド洋でモンスーンを利用し、香料、香辛料、陶磁、ガラス、織物、金属工芸品などを中心とする東西貿易である。（『世界大百科事典』、平凡社、1988、p.324）

満ちていたが、これらの諸矛盾は最悪の場合は先送りとなり、最良の場合は見事に超越された。これは陶芸の世界でも政治の世界でも同様に深い意味をもった。宋の統合力は牧歌的に夢見がちに見え、また壊れやすい貴重品のようにも見えるが、実質は力と緊張に満ちた、きわめて動的なものであった。

だが、それは非常に魅力的であったに違いない。南部の色町が突然首都となった杭州は水と山の中にあり、無数の庭園や運河や橋に彩られていた。無限へ連なっているような夢見る湖、そしてボードレール⁹の**ことばを借りるなら「娼婦で輝いている」**街路。杭州はボードレールのパリ、つまりフランスの第二帝政のパリと似て、ほとんど全ての重要なビジネスや政治はサロンと売春宿で行われた。とりわけ、それはティエポロ¹⁰のベニス——すなわちブラウニング¹¹の「ガルツピのトッカータ¹²」という詩のなかに出てくるベニス¹³に似ていた。

⁹ボードレール (Charles-Pierre Baudelaire, 1821-1867) フランスの詩人。『悪の華』によってフランス象徴派への道を開いた近代詩の祖とされる。フランスの散文詩の最初の傑作とみなされるフランスの近代詩人ベルトラン (Aloysius Bertrand, 1807-1841) による散文詩集『夜のガスパール』から想を得て、小散文詩集「パリの憂愁」を發表。散文詩というジャンルを文学として確立させた。(阿部良雄、『ブリタニカ国際百科事典 18』、「ボードレール」、ティビーエス・ブリタニカ、1975、pp.460-462、村松剛、『ブリタニカ国際百科事典 18』、「フランス文学」、ティビーエス・ブリタニカ、1975、pp.616-618、大浜甫、『平凡社大百科事典 13』、「ベルトラン」、平凡社、1985、p.623、井上輝夫、『世界大百科事典 26』、「ボードレール」、平凡社、2007、p.356)

¹⁰ティエポロ (Giambattista Tiepolo, 1696-1770)。18世紀イタリアのロココ文化を代表するベネチア派の大装飾画家。画風は明澄な色彩、大胆な遠近的空間設定、短縮法ポーズを利用した人物構図、主題の明朗、典雅で親密な世俗的解釈などの特徴を持つ。フレスコによる装飾や祭壇画のほかに、肖像画、レンブラント風の人物画を残している。(森田義之、『世界大百科辞典 19』、「ティエポロ」、平凡社、2007、pp.12-13、濱谷勝也、『ブリタニカ国際百科事典 13』、「ティエポロ」、ティビーエス・ブリタニカ、1975、pp.545-546)

¹¹ブラウニング (Robert Browning, 1812-1889) イギリス、ビクトリア朝の代表詩人。1846年にイタリアに移住し、イタリアを主題とした詩を数多く残している。詩人でありながら、絵画や彫刻、音楽に関する深い知識と技術を持っており、絵画や彫刻に関する詩が多い。晩年はヨーロッパを渡り歩いた末にイタリアに戻り、ベネチアにて死去。宗教と科学の間の葛藤で懐疑主義が支配した時代において「劇的独白」という単一の人物によって語られる主観を客観視して語る新詩手法を生み出した。(森清、『ブリタニカ国際百科事典 17』、「ブラウニング」、ティビーエス・ブリタニカ、1975、pp.452-453、松浦暢、『世界大百科事典 25』、「ブラウニング」、平凡社、2007、p.35、土屋潤身、『詩人ブラウニングの世界』、八潮出版社、1980)

詩をもう一度読んでみよう。感傷的だが、ガスパラ・スタンパ¹⁴もそうであったし、蘇東坡とも大きく違ってはいない。

ベニスとベニスの人々にとって、生まれて花を咲かせて散っていく運命の彼らにとって
この地上において彼らは実をならせたのだが、その果実とは歓喜と狂気であった
キスを止めなければならなかったとき、魂のどこが残ったのだろうか
「塵と灰！」とあなたはきしるように言う、私は心を叱りたい
親愛なる死せる女たちよ、あのような髪と共に、すべての黄金^{ゴールド}はどうなった
あなたたちの胸に下がり、胸を擦っていたあの黄金^{ゴールド}は？
寒い、私は年を取った

感傷は中産階級の特質だ。しかもそれは貴族化さ

¹²「ガルツピのトッカータ」とはベネチアの作曲家、ハーブシコード奏者であるガルツピ (Baldassare Galuppi, 1706-1785) を題材とした詩。ガルツピはオペラ・ブッフアの作曲家として大きな足跡を残した人物である。トッカータとは華麗・急速な演奏を主眼としたオルガンなどの有弦楽器のための前奏曲、幻想曲、または即興曲風の楽曲である。「ガルツピのトッカータ」はブラウニングによる音楽を主題とした詩の1つであり、この詩によってブラウニングは故人であるガルツピとの架空的な会話を試みた。この会話から18世紀のヴェネツィアの廃頹を非難した。(ヴェニヤル・マルク、『ラルース世界音楽人名事典』、「ガルツピ、バルダッサーレ」、福武書店、1989、p.237、戸口幸策、『音楽大事典第2巻』、「ガルツピ」、平凡社、1982、p.629、土屋潤身、『詩人ブラウニングの世界』、八潮出版社、1980)

¹³ベネチア共和国後期のベニスを指す。この時代のベニスにはコルティジャーナと呼ばれる高級娼婦が多く存在した。彼女たちは大変教養を備えた人たちであり、宮廷やサロンへ出入りし、貴族や国賓たちと政治の話をしていった。(ルカ・コルフェライ、『図説ヴェネツィア「水の都」歴史散歩』、河出書房新社、1996)

¹⁴ガスパラ・スタンパ (Gaspara Stampa, 1523-1554)。イタリア、ルネッサンス時代の女性詩人。愛に関する詩を多く残している。彼女の死後、姉の手によって唯一の作品である『詩集』が世に出された。ロマン主義の時代になって高く評価されるようになる。当時の女性にしては自由な恋愛思想を持ち、その思想が詩に強く反映されていることから高級娼婦 (コルティージャ) であるという説がある。(堂浦律子、ガスパラ・スタンパ研究序説—『詩集』の特徴と評価の変遷を中心に—、イタリア学会誌 (46)、1996、96-120、201-202、ルカ・コルフェライ、『図説ヴェネツィア「水の都」歴史散歩』、河出書房新社、1996)

れた中産階級の感傷である。

蘇東坡は宋代で最高の詩人であり、また、人間の感情を詩で歌いあげるといふ点では中国が生み出した最高の詩人である。さらに彼は歴史上でもっとも偉大な書家の一人であり、その影響は日本の美しい書の伝統にまで及んでいる。蘇東坡は画家としても優れており、その抽象的な筆使いにおいては大家であり、霧が立ち込める月光の下で竹の葉を描くというモチーフを得意にしていた。これはあまりにも有名になったために、今でも香港のショップで売られている掛け軸の半分は蘇東坡の作品をモデルにしているほどである。杭州の知事時代には、中国の伝説上の有名な娼婦である蘇小小¹⁵の恋人でもあった。彼女の墓はいまでも西湖の湖畔にあり、人々に敬われている。

柔らかな東風が吹き湖面は白く穏やかだ
湖の北、湖の南、青い山々は暖かい霧に包まれて
消える
番の鴨は泥地で戯れる
鶯は啼きながら、若葉の中で交尾する

宋時代の基準では、これはかなり露骨な性愛の詩にあたる。それは存在でも非存在でもない宇宙での愛の行為であり、その宇宙では唯一のリアリティーは無条件の「空」であり、その「空」は現実でも非現実でもなく、またその「空」の背後にあるのは純粹に非決定の意識であり、いわば思考しない思考である。

湖の真ん中を孤独に漂う
急いで舟を停泊させるでもなく、錨をおろす底が
あるでもない
小さな舟の舳先のむこうには何も見えない

¹⁵ 蘇小小は中国の詩に登場する南朝の齊(479-501)の時代の名妓である。楽府詩集によれば雑歌謡の古辞に不幸な恋に死んだ女性の蘇小小の魂魄が来るはずのない恋人を永遠に待ち続けるという「蘇小小歌」があり、蘇小小自身が歌の作者であるという説もある。中国唐代の詩人権徳輿(759-818)による「蘇小小墓」、李賀(791-817)による「蘇小小歌」に取り上げられていることで知られる人物である。しかし彼女自身に関する記述は権徳輿以降の詩人によって詠まれた詩による創作のみであり、実際に彼女が存在したということは確認されていない。(原田憲雄、『李賀歌詩編1-蘇小小の歌』、平凡社、1998、pp.167-183)

籠から酒を取り出し、ゆっくり飲む
釣竿は暗い水面の上に突き出されたままだ

魔王ラーヴァナ¹⁶はブッダ¹⁷に教えを求めたことがあった。その時、ブッダは全宇宙の全ての山々と数多の宮殿や宝石やハーレムの乙女の姿を見せた。それらを見て、ラーヴァナの感性は突然逆転し、彼は完全な孤独に陥った。それを見てブッダは笑った。なぜ笑ったのか。それは二元性も非二元性も幻想に過ぎないことを知っていたからである。「平安」こそが、すべての状態を越えた唯一の真如の点だからだ。すると宇宙の全てのブッダと菩薩と、神々と、悪魔たちと、人々、獣たち、そしてすべての事物が笑った。楞伽経はこのように始まる。まだある。ブッダは教えを説いている時に、一輪の花を摘み、ほほ笑んだ。弟子の迦葉仏¹⁸だけがブッダがなぜ笑ったのかが分かったと言われている。言い伝えによると、迦葉仏は同じような意味のない行為で菩提達磨¹⁹に教えを説いた。その達磨が葦に乗って、日本で禪と呼ばれることになる教えを中国に持ち帰った。

では、宋の偉大な芸術家や詩人たちは例外なく

¹⁶ ラーヴァナ(Ravana)。インドの叙事詩『ラーマヤナ』に登場する羅刹(ラクシャサ)の王。ブラフマー(梵刹)の曾孫あるいは孫にあたり、富の神クーベラ(毘沙内天)の異母弟である。彼は苦行の結果、梵天の恩寵を受け、神々や鬼神に殺されない身体となり、兄クーベラから南海の都市ランカーを譲られたが、自己の力に慢心し乱暴狼藉の限りを尽くして数々の呪詛を受け、さらにラーマ王子の妻シーターを誘拐してランカーに幽閉したため、ラーマの攻撃をうけ殺される。(山折哲雄、『世界宗教大辞典』、平凡社、1991、p. 2019)

¹⁷ 仏陀(Buddha)。サンスクリット語のブッダ Buddha の音写。Buddha は budh (目覚める) を語源とし、「目覚めた人」「覚者」、すなわち「真理、本質、実相を悟った人」を表し、もとは普通名詞であり、仏教と同時代のジャイナ教でも用いた。ゴータマ・シッダールタはその一人で、のちゴータマ・ブッダとなり、それが仏教を創始した釈迦にほかならない。なお仏は仏陀の略ではなく、伝来の過程で Buddha が Bud となったものと推定される。(日本大百科全書、「仏陀」、<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000202279>、2015年10月16日アクセス)

¹⁸ 迦葉。仏陀の十大弟子の一人で、過去七仏の6番目の仏。頭陀第一といわれた。婆羅門の出身で、釈迦の入滅後、教団を指導し、第1回の經典結集(けつじゅう)を行った。パーリ語の經典を編纂。『デジタル大辞泉』、「迦葉」、<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001003226800>、2015年10月29日アクセス、『小学館 ランダムハウス英和大辞典』、「Kasyapa」、<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=40010RH093629000>、2015年10月16日アクセス)

禪の仏教徒だったのだろうか。いやそうではない。ほとんどは仏教を信仰せず、儒者であり続け、とりわけ自分たちの世襲的な哲学の伝統に特別な誇りを持つ洗練された人たちであった。儒者ではなく、儒学そのものが変わったのだ。直前の二、三百年の間に様々な思想が自由に混合し、新しい「言説の宇宙」が生み出され、人々の間に新しい意識が芽生えた。インドから流れてきた思想や、中国の土着的なアニミズムが混じりあい、元々の古い正統的な儒学が根本から変質を遂げた。

宋は二人の偉大な朱子学の創設者を生み出した。朱子²⁰と陸象山²¹である。朱子は現代で言う哲学者であり、それも中国で最も偉大な哲学者だった。陸象山は朱子の好敵手であった。ふたりは儒学をさらに体系的な哲学に作り上げただけで

はなく、個人を律する感受性へと変化させた。誤解を招くのを承知の上で、あえて西洋の哲学用語を使うと、朱子と陸象山の二人は形態（理）と潜在力（気）の相互作用を通じて、非在、すなわち一切の条件がない状態から現実が生まれて来ると主張した。朱子にとって、この二つの形而上学的原理は常に相互に作用するものであったが、形のある世界とは究極のところ、ひとつの——純粹で、実体のない——仏教的な空であった。一方、陸象山にとって、形は常に初源であり、その実存とは幻想であった。

¹⁹ 菩提達磨 (Bodhidharma)。生没年不詳。禪宗の開祖。インド名はボーディダルマ Bodhi-dharma。6世紀の初め、西域より華北に渡来し、洛陽を中心に活動した。唐代中期、円覚大師と諡される。同時代の仏教が煩瑣な哲学体系に傾くなかで、壁が何ものも寄せ付けぬように、本来清浄な自性に目覚め、ずばり成仏せよと説く、平易な口語の宗教運動家であった。あたかも8世紀より9世紀にかけて、急激な社会変革の時代に、人々は新仏教の理想を達磨に求め、不立文字、教外別伝（文字や言語、經典によって伝えられるものでなく、師弟の心から心に直接伝えられる）、直指人心、見性成仏（ずばりと、自己の心をつかむことによって、自己が本来は仏であると気づくこと）の四句に、その教義と歴史をまとめる。達磨は仏陀より28代の祖師で、正法を伝えるために中国に渡来する。南海を経て南朝の梁に至り、仏教学の最高峰武帝と問答するが、正法を伝えるに足らずとし、ひそかに北魏の高山の少林寺にきて、のちに第二祖となる慧可に会ったともいう。慧可が達磨に入門を求めて顧みられず、一臂を断って誠を示した説話や、「私は心が落ち着きません、どうか私の心を落ち着かせてください。君の落ち着かぬ心を、ひとつ俺にみせてくれ、そうすれば落ち着かせてやる。それはどこを探しても、みつけないことができません。俺はいま、君の心を落ち着かせ終わつた」という、慧可との安心問答は有名である。達磨の禪の特色は、そうした対話の語気であり、やがて人々は、祖師西来意（達磨は中国に何をもちたか）を問うようになる。この問いに答えることが禪宗のすべてである。達磨はさらに日本にきて、聖徳太子と問答したとされ、平安末期に達磨宗がおこって、鎌倉新仏教の先駆けとなる。禪宗史の発展が達磨の人と思想を理想化し、新しい祖師像を生むのである。近世日本で、頭から全身に紅衣をかぶり坐禅する起きあがり小法師の人形で知られる福達磨の民俗信仰がおこり、宗派を超えて広く日常化する。祖師達磨の新しい理想化の一つである。（『日本大百科全書（ニッポニカ）』、「達磨」、<http://japanknowledge.com/lib/search/basic/index.html?q1=%E9%81%94%E7%A3%A8&r1=1&phrase=0&sort=1&rows=20&pageno=1&s=s>、2015年10月16日アクセス）

²⁰ 朱子 (Chu Hsi)、1130-1200。中国宋代の儒学者、思想家。朱子は尊称。南宋の建炎4年(1130)9月15日、尤溪(福建省)に生まれ、生涯の大部分を福建の各地で過ごした。19歳で進士に及第、24歳で任官、各地の地方官を歴任し、煥章閣待制兼侍講を最後に65歳で退職、70歳で完全に引退したが、任官以来実際に在職したのは合計10年に満たなかった。在職期間以外は主として研究・著述と門弟の教育に従事、学問の面では、北宋に始まる新儒学(宋学)を集大成し、朱子学と呼ばれる独自の学問体系を樹立した。儒学史上、孔子以後の第一人者というべき存在で、朝鮮・日本をも含めて後世への影響が非常に大きい。『周易本義』『易学啓蒙』『詩集伝』『儀礼経伝通解』『四書集注』『四書或問』『資治通鑑綱目』『八朝名臣言行録』『太極図説解』『河南程氏遺書』『近思録』『伊洛淵源録』『小学書』『文公家礼』『楚辞集注』『朱文公文集』『朱子語類』ほか著書・編書多数。

（『国史大辞典』『朱子』、<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=30010zz239340>、2015年10月16日アクセス）
²¹ 陸象山 (Lu Hsiang-shan)、1139-1192。中国、南宋の思想家。江西省金溪の人。字は子静、号は存齋、象山先生と称された。兄の九齡(復齋)とあわせて江西の二陸といわれ、朱子と思想的に対立した。象山の思想は、人間の本心である徳性をしっかりと保持し、利欲に惑わぬことを第一とした。朱子が経書(儒教の古典)をよく読み、知的に深めていくことを重視したのに対し、象山は本心に基づく道徳的実践を重視した。人はみな、古来の諸聖人と同じ心を生まれつき保有して、しかも道徳的な判断力や感覚、すなわち「理」をもっている。心が理を備えていることを「心即理」といった。心に内在する天理を信じ、これに従って行動することを強調した結果、儒教古典としてたいせつな六経でさえも「我が心の注脚」とみるようになった。経書に注釈を書くことに努めた朱子とはこの点が対立する。象山と朱子はしばしば手紙で論争し、1175年には江西省の鵝湖で会見したが意見は一致しなかった。朱子は象山を、学問を軽んずる実践主義者と評し、象山は朱子を、実践を軽んずる知的博学主義と評した。象山の門下の楊簡は、やがて静坐主義となり、禪思想とも似てきた。元代になると朱陸折衷の学風がおこったが、明代中期に王陽明は、象山の「心即理」の思想を認め、そこから「致良知」という新しい思想を生み出し、朱子学を批判する陽明学となった。（『日本大百科全書（ニッポニカ）』、「陸九淵」、<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000234841>、2015年10月16日アクセス）

この大急ぎの要約で唯一問題なのは、理（形、原理）そのものを我々の感覚における潜在能力と見る考え方と、気を一種の生な物質として個を生成する原理とする考え方である。朱子は人間の精神は理と気の組み合わせだと考えた。一方、陸象山は人間の精神はもともと所属していた理の世界から外れてしまったので、賢明で善良な人間が目的とするのは静かな瞑想によって道を踏み外した精神とその本性を見つけ出し、全体との関係を理解することであると考えた。最後には、ことばや思想を経由しないで、突然すべてが明らかになり、個とは実は全体であることを知るようになる。ウパニシャッド哲学²²のことばを借りるなら「それはあなたである」ということになる。

二人の哲学者にとって自分たちが作り上げた形而上学よりもはるかに重要であったのは、この時代の禅宗の信者も、朱子学の儒者も、ある特別な感受性、言い換えるなら、ある特別な生に対する態度を育て上げたという点である。その感受性とは理想としての菩薩の世界である。菩薩とは最終ゴールである涅槃に手が届きながらも、穏やかで、執着心の欠片もないその愛から、衆生を救うまでは自己の救済には向かわないと誓う存在のことである。この誓いするとき、菩薩は執着心が微塵もない微笑を浮かべる。それは、すべての動物、花々、

そして原子に至るまで、すべての存在には仏陀の心が宿っていることを知っているほほ笑みであり、存在も非在も、仏陀も非仏陀も、涅槃も非涅槃も、幻想も非幻想もないことを悟っている微笑みでもある。この菩薩の理想世界が形として最も発達したのが仏教であることも、また、南宋画に見られる菩薩の物憂げな、過剰に洗練された微笑みこそがその完璧な表現であることも確かだ。しかし、少しトーンを下げて、より「実践的」にすると、それは儒者たちの理想の世界にかなり近くなる。儒教も菩薩も、そのすべてに無関心に見える言語の壁の向こうの理想の世界には、現実的な責任感が伴うのだ。正統的なヒンドゥー教との違いに注意しよう。『バガバッド・ギーター²³』の中で、戦車の上のアルジュナは行動と無行動が一致して同一になるのを知る。しかし、中国ではこれはほとんど公然たる、倫理的な、社会的責任を伴う行動への強制的な規範となり、爾来、儒教とはそのようなものだと考えられてきた。

というわけで、単に蘇東坡は霧の立ち込めた山々や竹の葉の夢想家ではなく、杭州の人々への愛と献身も持った偉大な政治家でもあった。そのため、杭州の人々にとって、蘇東坡は半ば神のような存在となった。そして、現代の利他的で教養に満ち満ちた英国の官僚のように、蘇東坡は自分の仕事への哀愁と、立場が生み出す自分自身と自

²² ウパニシャッド (Upanishads)。古代インド哲学書。インド思想の源泉としてきわめて重要な文献である。バラモン教の聖典〈ベダ〉の4部門のうち最終部門に相当するため〈ベダータンタ Vedanta (ベダの末尾)〉とも呼ばれたが、この別名はのちに〈ベダの極致〉と解釈されるようになった。〈ウパニシャッド〉の語義は、通説に従えば、〈近くに座る〉というサンスクリット動詞として意味から転じて、師弟が対座して師から弟子へと伝達される〈奥義書〉とも訳する。(中略)ウパニシャッドは主として対話・問答形式で書かれているが、〈古ウパニシャッド〉に限っても数百年の期間をかけて、多数の思想家の手を経て作成されたものであるから、内容的には種々雑多の思想を含み、相互に矛盾する説が収められていることも少なくない。その中で、特にウパニシャッドの中心思想と目され、かつ後世に最も大きな影響を与えたのは、〈梵我一如〉の思想である。これは、宇宙の本体としての〈ブラフマン〉、および人間存在の本質としての〈アートマン〉とをそれぞれ最高の実在として定立したうえで、この両者が本質的には同一であって、同一性を悟ることによって解脱が得られると説くもので、『リグ・ベダ』末期以来徐々に発展しつつあった一元論的傾向が、いちおうの頂点に達したものと考えられている。(山折哲雄、『世界宗教大辞典』、平凡社、1991、p.226)

²³ バガバッド・ギーター (Bhagavad-Gita)。《主の歌の意》ヒンズー教の聖典の一つ。クリシュナに化身したビシュヌ神への信愛(バクティ)を説く宗教哲学詩。大叙事詩「マハーバーラタ」の一部をなす。(『デジタル大辞泉』、「バガバッド・ギーター」、<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001014653700>、2015年10月16日アクセス) インドの代表的な古典。紀元前1世紀ごろの成立。もとバガバタ派の聖典であったが、のちに叙事詩「マハーバーラタ」の一節に組み入れられ現在に至る。全18章700詩からなる。聖地クルクシュートラを舞台とするバラタ人の戦争がいままに開始されようとするとき、王子アルジュナは骨肉の戦いに疑念を抱いて逡巡する。そこでビシュヌの化身たる御者クリシュナは、人は行為の結果を顧慮せず、私心を捨て去って、ひたすら自己の本務をなすべきである。唯一神への献身的な愛によってのみ人は救われると王子に説き示し、その疑念を取り払う。このバクティに基づく本務の遂行を説くところに本書の一大特徴があるが、同時にサーンキヤ、ヨーガ、ベダータンタなど当時の諸哲学思想をも折衷・統合して、きわめて幅広い内容をもった宗教的哲学詩となっている。(『日本大百科全書(ニッポニカ)』、「バガバッド・ギーター」<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=1001000182672>、2015年10月16日アクセス)

分が統治する人々の中の隔たりを強く意識していた。

裕福な人たちは宴会の準備をする
 絹と錦が広間を飾る
 貧乏な人たちには提供できるものがない
 それどころか、彼らは徴税人の目から
 家の白を隠そうとする
 私はここではよそ者だ
 派手な行列が大通りや路地を進んでいく
 私も古い民謡を歌うのだが
 それは自分に対してであって
 誰も私と一緒に歌ってくれない

では再び、蘇東坡の好敵手である、偉大な改革者王安石の詩を読んでみよう。彼はわずかな間ではあったが、この理想化された儒学のユートピア的な施策を実行した。

私は真夏のときにいばらの杖を突いて
 岩の多い山道を登る
 その山道は真昼でも葉の影が暗闇を作る
 私は立ち止まって水の静かな音を聞く

宋王朝の感受性は両極端で、片方は静かな瞑想で、言い換えると、決して絶対ではない底知れないひとつの「絶対」への静かな潜航であり、もう一方は生命や事物のすべての面についての強い、活発な好奇心で、これは自然のなぞへの探索となる。

この時期は中国の科学が独自の発達を遂げ、観察、思弁、技術が満開を迎えた時期であった。少し前に発明された印刷術はこの時代に成熟期を迎えたので、宋の時代の書物は今でも最良であると考えられている。唐時代の物語はグリム兄弟と同じぐらいに単純であり、真のフィクションは宋の白話体から生み出された。そして全く新しい詩のタイプ——より自由で、音楽的にはより複雑な詩が生まれた。蘇東坡はこの新しい詩の最初の巨匠である。現代的な演劇の起源は宋時代に遡ることができるので、静謐で、通にしか分からないような洗練された出し物はいまでも「宋」と呼ばれている。もっともそれらの出し物は後の時代の作品がほとんどなのだが。音楽は、少なくともプラトンやピタゴラス学派と同じぐらいに儒教にとっては重要であったので、徹底的に分析され、体系化

されることになった。だから現在でも、静謐で、通にしか分からないような洗練された音楽は「宋」と呼ばれている。日本の宮廷の荘厳な舞の幾つかは宋時代に由来するとする説もある。道教も再び盛んになり、より体系的な神話と哲学が提供され、そして、この時代の道教の導師たちの調査や思弁から錬金術やそれに関連した現代の科学の原型となるものが生み出され、とりわけ錬金術は世界中に広がっていった。植物の標本を描いた本草書、漢方薬の解説書、刺鍼術、あん摩や物理療法などが纏められ、また、西洋では600年後に生み出された百科事典がこの時代に編纂されている。中国の商人は南海を航行し、少なくともインドやペルシア湾までたどり着いている。ひょっとしたら、アフリカの沿岸にまで到着していたかもしれない。